
【五枚会】スターダスト・ノベルズ

聖騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【五枚会】スターダスト・ノベルズ

【Nコード】

N61550

【作者名】

聖騎士

【あらすじ】

無言ダンテさん企画【五枚会】用の短編集です。

【五枚会】とは、「面白い作品を書く為の技術向上」が目的であり、「プロ作家志望」かどうかなどは全く関係ありません。禁則事項とテーマを定め、それを五枚という掌編で仕上げるにより、文章力や表現力を向上を目指します。

サブタイトルの【 】は、その回のテーマです。

第一回【人形】：冴島くん（前書き）

禁則事項…主人公の「」による台詞の禁止

改行・空白含めて原稿用紙五枚分、2,000字ぴったりで書いてみました。

あえて一人称独白は避け、三人称視点で書き、さらに「！」「や」「、」「…」（三点リーダー）なども一切使わずに書いてみました。

第一回「人形」：冴島くん

「僕が思うに性犯罪を助長させている背景には社会的、経済的な要因が重層的に積み上がっていると思うんだ」

冴島 明は神経質な目に知性の光をきらめかせながら眼鏡を押し上げる。上唇を舐め上げると横を通り過ぎる女子のスカートの裾から伸びる白い太もをちらと見遣る。向かい側に座る多田洋平の視線に気づくと、落ちた消しゴムを探していたような振りをして視線を戻す。

「社会的要因とは言うまでもなくモラルや社会的規範、良識と言われるものだ。ここで言う社会とは、集団での生産的生活を指す。その中では人間同士の精神的な枠組みがあつて、誰しもその枠組みの中で自己を成立させている。つまり簡単に言つと、周囲の目を気にするってことなんだけど」

放課後の教室は慌ただしく騒がしい。それでも冴島は弁舌をやめない。まるで自分の意見を周囲に聞かせたいかのように、さらに朗々とした声で話し続ける。

「経済的な要因もわかるよね。失業率の増加、終身雇用の崩壊、各種の税制改革という名の搾取、物価の上昇に情報過多。もらう給料が少ない上に出ていく分は増え続ける。これじゃ欲しいものも買えないし好きなこともできない」

冴島は唾を飛ばしながら話し続ける。すぐに帰るつもりで机の上に置いた多田の鞆に、冴島の唾が転々と広がっている。多田はそれを見て顔を顰めたが、冴島はそんなことには一向に気づかない様子でジェスチャまでくわえ始めた。

「性犯罪者の周囲を取り巻く環境は最悪だ。精神的に縛り付けられ、抑圧され、圧迫される。経済的にも追いつめられ、日々困窮している。そうなれば当然ストレスが溜まるだろ」

冴島はそこで一旦話を止め、多田を見つめる。何かしらの反応が

欲しいのだろう。教室にはもうほとんど人は残っていない。多田は仕方なく二度続けて頷く。それを見た冴島は嬉しそうに眼鏡の奥の目を細める。上唇をまた神経質そうに舐め、上げていた両手のひらをそのまま握りしめる。

「だから性犯罪が起きる。抑圧された鬱憤が欲望へと変わり、社会的・肉体的にも弱者である若い女性へと向けられるんだ。これは絶対に許される犯罪ではない」

冴島は力強く多田の机を叩く。しかし鞆があつたため、多田の鞆はひしゃげ、中に入っているミネラルウォーターのペットボトルが嫌な音を立てる。

多田は何も性犯罪は痴漢やレイプばかりではないと思う。それに社会的・肉体的弱者だったら高齢者の方が当てはまる気もするのだが、今はそれらを言うべきではないだろう。帰る時間が遅くなるだけだ。

「そこで僕は一つの解決策を見出した。これは性犯罪をこの世からなくすために多大なる貢献を果たすだろう。そしてこれは僕たちに大いなる利益ももたらしてくれる。つまり君が性犯罪を犯すこともなくなるわけだ」

多田は聞き捨てならないと思う。自分はそんなに性犯罪を犯すように見えるのだろうか。クラスの女子と恥ずかしくておしゃべりもできない小心者だというのに。

「これを世の中に広めれば性犯罪は激減する。いや、今後改良して性能を高めれば撲滅できるかもしれない。僕たちがこの世から性犯罪を根絶させられるかもしれないんだぞ」

冴島は興奮してきたらしく、顔を紅潮させさらに甲高い声を上げる。誰もいなくなった教室に、冴島の声だけが響いている。遠くに吹奏楽部が練習を始めた音が聞こえる。教室の窓から一望できるグラウンドでは、野球部やサッカー部が列を作ってランニングを始めている。

僕は早く帰ってテレビを見たかった。夕方の番組を観ることがで

きるのが、帰宅部のいいところなのに。冴島はそんな多田の気持ちなどお構いなしに、嬉々として自分の机の横に置いてあった紙袋を取り上げる。そう言えば朝からずっとそこに置いてあった。多田は気にはなっていたが、余計なことを言うのと長時間拘束されるのがわかっていたので聞くことはしなかったのだ。つい先ほどまでは。

「これは僕が研究に研究を重ねて作り上げた性犯罪防止のための道具だ。これが製品化されたらすごいぞ。きっと飛ぶように売れる。僕が保証するよ、間違いない。これは売れる。そしてその効果も抜群だ。この世から憎むべき性犯罪が消える時がきたんだ」

冴島は立ち上がり、紙袋を高々と持ち上げてそう宣言する。そしておもむろに紙袋の中に手を入れ、肌色をした布を取り出す。いや、それは布ではない。どうやらナイロン製のゴムのような素材だ。冴島はその端に付いている空気口らしきところをくわえ、必死に空気を入れていく。僕は嫌な予感がしていた。ものの数分でそれはできあがった。

「どうだ、これが僕の発明した性犯罪撲滅人形試作品第一号だ」
いわゆる“ダッチワイフ”。多田は鞆を取り上げ、無言で教室を出る。冴島は「おい待てよ、君に使い心地を」と言いながら必死に追いかける。

多田は何も見なかったことにして、教室の扉を閉めた。

第一回【人形】：冴島くん（後書き）

彼はある意味すごいですね。

第二回【手癖】：おじいちゃん（前書き）

禁則事項：登場人物の名前の記載禁止

<オリジナル禁則事項>

- ・「！」や「？」「…」を使わず、地の文で表現する。
- ・原稿用紙五枚びつたり、つまり改行・空白を入れて2,000字びつたり。
- ・登場人物を3人以上登場させる。
- ・語尾を変えただけのキャラの差別化をしない。

第二回【手癢】：おじいちゃん

山間から吹き込む初夏の風は心地よく稲穂を揺らす。僕はコンクリートで固められた歩道を走り、国道に出る。この道はもう何度こうして走っただろう。そのたびに僕は憂鬱な面持ちでオレンジ色のセンターラインを眺める。

土手と国道の間にある用水路の水は澄んで、さらさらと涼しげな音を立てている。僕は額とこめかみに流れる汗を拭い、しばらくして見えてきた白亜の建物の前で立ち止まる。

普段普通に生活していれば訪れることは滅多にない場所。白と黒のツートンカラーに赤色灯の付いた車が二台、玄関脇に待機している。この地域一帯を管轄している警察署は、僕を待ちかねていたかのようにまぶしい陽射しを反射していた。

いつもの婦警さんに案内されて生活安全課へ向かうと、退職した工務店の作業服を着たおじいちゃんが巡査さんと話をしていた。

「おじいちゃん」

僕が声をかけるとおじいちゃんは振り返って一瞬驚いた後、悲しそうな顔になる。

「ばあさんはどうしたんじゃ、また膝が悪いんかい」

僕はため息をついて巡査さんを見る。

「お孫さんですか」

「はい、おじいちゃんがお世話になりました」

「あの店では初めてだけど、何度も前科があるよね。認知症だからお店の人も今回は大目に見るって言うてくれたけど、悪いけど次はないと思ってね」

「はい、どうもすみませんでした」

僕は巡査さんと婦警さんに頭を下げておじいちゃんと警察署を出る。

おじいちゃんが万引きをするようになったのは去年の冬から、おばあちゃんが亡くなってからだ。近くのコンビニや買い物に出かけたスーパーマーケットなどでしょっちゅう勝手にポケットに物を入れてしまう。家に帰ってから買ったはずのない香典袋や筆ペンなどを何度頭を下げて返しに行ったことか。お陰でコンビニは出入り禁止になってしまっている。父さんの知人が経営しているコンビニだからそれで済んでいるようなものの、普通ならとくに留置場行きだろう。先日母さんが大切にしているイヤリングをおじいちゃんが盗んで、タンスの引き出しに隠しているのがわかって一騒動になった。

「ほんとに手癖が悪いんだから」

母さんはそんなおじいちゃんを嫌って、警察へ迎えに行くのはいつも僕の役目だ。

「ボケ老人なんだからそんなに目くじらを立てるなよ」

父さんは血のつながった息子だけにそんなおじいちゃんをかばう発言をするが、普段は仕事で家にいないのでその効果は薄い。結局は僕が母さんとおじいちゃんの緩衝材になるしかないんだ。

蝉時雨の降り注ぐ陽射しの強い帰り道を、おじいちゃんとはとぼと歩いて帰る。

「どうしてばあさんは迎えに来てくれないんじゃ」

おじいちゃんは悲しそうに俯きながら砂利を踏む。僕は歩調をおじいちゃんに合わせながら、その小さな肩を見る。

「おじいちゃん、おばあちゃんはどうもないんだよ」

「ばあさんはわしが嫌いになったんじゃ」

「そうじゃないって」

「ばあさんに会いたい」

おじいちゃんはぽつりと道ばたに言葉を置いていく。

僕が小学校中学年の頃、おじいちゃんにはよく夏休みに夜釣りに連れて行ってもらった。初めて鰻を釣った時、僕は引きの強さで川

に引きずり込まれそうになった。そんな僕に驚いたおじいちゃんは後ろから遅い腕でがっしりと竿を掴み、ぐいぐいと立てた。僕にとって初の釣果だったその鰻は、一メートル四十センチはある大物だった。頭に錐をどんと刺して動かないようにして鰻を開いていくおじいちゃんの包丁さばきを、僕は目を輝かせて眺めていたものだった。僕にとっておじいちゃんは何でもできるスーパーヒーローだった。

木漏れ日の中を歩いていくおじいちゃんの背中中は、ずいぶん小さく見えた。

町がクリスマスの装飾で色鮮やかに彩られた頃おじいちゃんは亡くなった。火葬場で柩を釜に入れる時、母はあのイヤリングをおじいちゃんの横に置いた。

「これお嫁に來た時にお義母さんにもらった物なの」

母さんの目に涙はなかったけれど、物悲しい瞳はおじいちゃんの違いを出を湛えているように見えた。

「お義父さんは悪いことをして、お義母さんに叱って欲しかったのかもね」

結局おじいちゃんの手癖の悪さは、最期まで治ることはなかった。僕にとっておばあちゃんは、いつもおじいちゃんの一步後ろに下がって控えめに微笑んでいる印象しか残っていない。横暴で我が儘で頑固者だったおじいちゃんは、実はおばあちゃんの尻にしっかりと敷かれていたのかもしれない。

乾いた冬の空におじいちゃんの白い煙が立ち上っていく。雲一つない青空に細く伸びる煙はどこまでも高く上っていく。

僕はおじいちゃんを迎えに行くことはもうないんだと思うと、肩の荷が下りた解放感と不思議な喪失感が込み上げてくるのを感じる。気がつくと僕の頬には、冷たい涙がひとしずく流れていた。

第三回【退屈】：委員長（前書き）

禁則事項

その一：「？」と「！」の使用禁止

その二：登場人物の名前の記載禁止

<オリジナル禁則事項>

・原稿用紙五枚ぴつたり、つまり改行・空白を入れて2,000字
ぴつたり。

- ・極力地の文を減らす
- ・登場人物を5人以上登場させる。
- ・今まで書いたことのない作風で

第三回【退屈】：委員長

「あゝあ、何か退屈ねえ。だからあんた死んで」

「うほっ、いきなり」

「まあまあ、退屈なのは仕方ないんだから、どう暇つぶしするか考えればいいじゃん」

「そうそう、それで退屈しのぎになる死ね」

「何気なく語尾に悪意を感じる」

「考えるって、あんた何か面白い話でもしてくれんの」

「そうだなあ、こいつが通り魔に包丁で刺されて死ぬ話なんてどうだ」

「結局ぼく死ぬしかないのか」

「こらこら、そんな簡単に死ぬとか生きるとか言っちゃいけませんよ」

「生きるはいいと思いますう」

「じゃあ生きる話にしようぜ」

「生きる、それは苦悩に満ちています」

「お、何だか哲学的だな」

「つてかあんたウチのお菓子勝手に食べないでよ」

「いいじゃん、一個くらい」

「ぶち壊しですう」

「生きる、それは何かが壊れ、生まれ出ずるものです」

「イミフ」

「なあ前から思ってたんだけど、その省略言葉ってわけわかんないよな」

「そっかな、ウチはけっこう使ってるよ」

「ちなみにイミフとは意味不明の意です」

「んなの知ってるし」

「んじゃトリュフはトルーマンが行方不明って意味か」

「まさにイミフ」
「お前ら声を合わせて言うな」
「ってかさあ」
「お前こそ文頭に“っ”付けすぎだ」
「てっかさあ」
「後ろに持つてけばいいってもんじゃねえし」
「話が進みませえん」
「最近クラスのみんな帰るの早くなったよね」
「まあな、うちの学校大学進学希望者多いからな」
「まだ二年なのにな」
「ばっか、もう二年なんだよ。受験はもう始まってんだ」
「なんかこのまま卒業までいっちゃうのかなあ」
「それは寂しいな」
「ってかあんだなんで顔赤いの」
「ほんとだ、何かキモいですう」
「ちなみに気持ち悪いの省略言葉です」
「いちいち説明せんでええわ」
「なんで関西弁になるんだよ」
「ほら、また話がズレてきた」
「そうそう、お前なんで顔赤いんだよ」
「え、あ、いや」
「ああゝまさか」
「なんだよ」
「委員長の『いっちゃう』って言葉に反応したんじゃ」
「まじで」
「純粹ですね」
「いや純粹じゃないから、まじキモいから」
「やっぱあんた死んで」
「委員長がイっちゃったらほんとに死んでもいいかも」
「うはっ、なにこれたぎる」

「ウザ」

「委員長の目、冷たあ」

「あれ、またさらに赤くなりましたあ」

「今度はなんだ」

「い、いや別に」

「別にじゃねえだろ、委員長のことチラ見してんだろ」

「あ、え、い、いや」

「なんだよ、教えるよ」

「な、なんでもないって」

「いいから、いいから」

「おい、俺にも教えるよ」

「ウチもなんか気になる」

「うはっ、まじかよお前とことんそっち系だな」

「教えてよお」

「こいつさあ」

「うわあ、やめて止めて黙って」

「委員長がもが」

「おい、こいつ捕まえとけ」

「わかりました」

「で、委員長がなんだよ」

「腕組みした委員長の腕にその巨乳が乗っかってるのが萌えたんだと」

「キモいですう」

「でもその気持ちウチはわかるなあ、だって委員長の胸ってちょっと規格外」

「ちよつとなにその言い方、人をおっぱいお化けみたいに」

「十分モンスター級ですう」

「あんたまで」

「委員長顔真つ赤だよ」

「もう、なんで男っておっぱいばっかなんだろ」

「おっぱい、それは男のロマンです」
「んなロマンいらないし。とにかく話戻すけど卒業までになにか思い出に残ることしたいんだよね」
「思い出に残ることかあ」
「あ、また赤くなりましたあ」
「だいたい考えてることわかるけどね」
「んじゃスルーって方向で」
「みんなでカラオケ行っ歌いまくるとか」
「定番ねえ」
「居酒屋で朝まで飲み」
「却下です」
「だよねえ」
「お、こんなのどうだろ」
「なになに」
「みんなで文集を作る」
「めんどくせえ」
「だからいいんだと思いますう」
「俺らまだ二年だぜ。卒業のこと考える前にやることあんだろっが」
「例えばなに」
「例えば恋愛したり」
「恋愛したあい」
「恋愛、それは甘酸っぱい青春の象徴です」
「委員長って誰か好きな人いるのお」
「え、あ、あたしは」
「ああ、いるんですう」
「うそ、委員長って恋愛とかまったく興味なしだと思ってた」
「きよぬーなのにな」
「巨乳恋愛に関係ないから」
「で、だれだよ教えるよ」
「う、うるさいわよ」

委員長の机を叩く音が夕日の差す教室に響く。

「お、委員長、こんなところで一人で何やってんだ」

「あ、先生、ちょっと退屈だったので一人遊びを」

「退屈って、今日お前塾行く日だってクラスの仕事断っただろ」

「あ、そうだ、やばい」

委員長は慌てて担任に一礼すると、鞆を持って教室を出て行く。

黒髪が夕日に映えて茶色く輝いて見える。

「綺麗だしいい子なんだけど、痛い子なんだよなあ」

担任の嘆息は、誰もいない教室に吸い込まれていった。

第三回【退屈】：委員長（後書き）

委員長は一人何役やっていたでしょうw

第四回【静寂】：あの人（前書き）

禁則事項

その一：一人称と三人称の使用禁止（二人称で書く）

<オリジナル禁則事項>

- ・原稿用紙五枚びつたり、つまり改行・空白を入れて2,000字びつたり。
- ・二人称の対象を読者にしない。
- ・一人称独白との区別をはっきりさせる。

第四回【静寂】：あの人

あなたは幼少のころから頭がよかった。そして静寂を好んだ。だから近所の子がくだらない遊びに夢中になっている時も静寂の中で一心不乱に本を読み耽り、知識を吸収することに快楽を覚えた。そのお陰で視力が低下し、日光にも弱くなった。そのためあなたは、分厚い眼鏡を掛けるようになる。

中高と優秀な成績を修め、あなたはこの国で一番頭が良いとされている大学に入学した。その頃すでに将来を嘱望される存在となっていた。司法・行政・医療・軍事学、さらには心理学さえも修め、あなたの知識欲は年ごとに肥大化していく。そして宗教学や歴史、考古学にまでその貪欲なまでの知的好奇心の触手を伸ばしていく。

あなたはあなたの現在の立場に疑問を抱き始めていた。自分はこのままでいいのだろうか。世の中は間違っている。誰かが正さねばならない。旧約聖書の魅力に取り憑かれたのは、この頃であった。

聖書の中には、世界が滅ぼされる記述があり、あなたはその魅惑に取り込まれる。世の中が腐っているならば、誰かがその膿を出さなければならぬ。しかし自分にはその力がない。ではせめて世界の真実の姿を知ろう。この目で真実とは何かを見極めよう。そう思っただけであなたは大学卒業後、政府の特務機関に所属することになった。この機関は合法・非合法を問わず、絶対的な権力でもって国を裏から操る機関である。そしてそこには知られざる歴史が膨大な資料と共に秘匿されていた。そこであなたはあなたの運命を変える古文書に出会うことになる。

古文書によれば、旧約聖書に書かれた記述は実際にあったことのようにだった。そして驚くことに、あなたは世界を滅ぼす側の人間だったのだ。

かつて世界を支配していた王家があった。あなたはその王家の血筋を引く末裔だったのだ。

あなたは狂喜乱舞し、機関の膨大な資料を読み漁り、あなたが本来のあなたを取り戻す方法を発見する。あなたは本来の自分に戻り、この腐った世界を浄化するための新しい世界の王たらしめる。

あなたが本来の自分に戻るためには、かつての王家が持っていた世界を滅ぼすほどの威力を持った武器を手に入れる必要があった。いくらあなたに知識があっても、世界を支配するためにはどうしても力が必要だった。そしてその武器を手に入れるためには青い宝石が必要であった。それは田舎に住む一人の女の子が持っていた。なんとその子もあなたと同じ王家の末裔だったのだ。

あなたは首尾良く宝石を手に入れ、その武器のある場所へと辿り着く。軍部のバカどもは目先の財宝に目が眩み、略奪の限りを尽くしている。しかしあなたはそんな物には全然興味はなかった。

あなたはとうとう武器を手に入れる。新しい世界の創造だ。歓喜に打ち震えるあなた。しかし女の子の抵抗に遭う。女の子は新しい世界の支配者の地位には興味がないようだ。粗野な男の子の邪魔も入り、あなたは武器を稼働するために必要な青い宝石を女の子に奪われてしまう。

あなたは逃げる女の子を追う。女の子は全速力で走って逃げるが、あなたは徒歩で追いつめる。新世界の王たるあなたに不可能はないのだ。

女の子を王の間に追いつめる。宝石を取り返そうとすると、あの男の子が大砲を持って現れる。あなたは特務機関で培った射撃技術でもって少々荒っぽい交渉を試みる。同じ王家の血を引く女の子を傷つけたくなかったので、女の子のお下げ髪を片手で一発で撃ち抜いていく。

お子様たちは観念したようで、少し話をする時間をくれという。基本紳士のあなたは、三分間待ってやることにする。即席ラーメンを作る間に世界が手に入るなら早いからだ。あなたは中折れ式リボルバーの装填を三秒で終える。特務機関で培われたあなたにとってそんなことは造作もないことだった。

話は終わり、お子様たちは覚悟を決めた表情であなたを見る。仮にお子様たちが抵抗してきたとしても、あなたはまったく怖くはなかった。あなたは瓶で頭を殴られても怪我一つせず気絶するくらいで済んでしまう石頭の持ち主なのだ。男の子も頑丈そうだが、あなたには敵わない。

お子様たちは手を握って前に出す。その中には青い宝石が入っている。あなたは自分の紳士的な態度でお子様たちが不毛な争いをせず宝石を返してくれるものと思って安堵する。

ところがお子様たちはとんでもないことを口走る。

「バルス！」

世界が閃光に包まれ、光に弱かったあなたの網膜は焼けついてしまう。視力を失ったあなたは次第に崩れ始まった世界をさまよい歩く。轟音と震動がすべてを揺るがし、何もかもが崩壊していく。あなたは大量の瓦礫と共に落ちていく。あなたの夢や理想と共に。

遠のく意識の中、あなたは思い至る。これでよかったのかもしれない。これで自分だけの静寂の世界に戻る。

あなたが暗闇の世界に到達した時、あなたの世界は静寂に包まれていた。

第四回【静寂】：あの人（後書き）

崩壊するシーンをよく見ると、“あの人”が落ちていくのがわかるんですよ。

第五回【憎悪】：高司（前書き）

禁則事項

会話文の使用禁止

<オリジナル禁則事項>

- ・原稿用紙五枚びつたり、つまり改行・空白を入れて2,000字びつたり
- ・心理描写の使用禁止
- ・今までにないテーマの盛り込み方を考える

R-15程度の性描写、残酷表現がありますのでご注意ください。

第五回【憎悪】：高司

伸び始めた黒髪が額にかかる。高司は久しぶりに嗅いだ自由な空気を深く吸い込む。青空を白い雲が横切り、つがいの小鳥がかわいらしい鳴き声を立てながら木々を渡っていく。

自宅に向かう土手を歩いていくと、下校途中の小学生の列がすれ違っていく。高司は眩しいものでも見るかのように目を細めて振り返る。その顔は晴れ晴れとした満面の笑顔だった。

無期懲役、それが高司に下された判決だった。

赤ん坊の泣き声が昼下がりの団地の一室に響いている。室内では金髪の男が、下半身を剥き出しにされた女性の上で腰を振っている。女性の目には涙がたまっているが、焦点は定まっていない。自らの体液で湿ったカーペットの上で、男に突かれるままに揺り動かされている。時折力なく伸ばされる右手の先には、生後三ヶ月を過ぎたばかりの泣き叫ぶわが子。身動きして抱き寄せようとすると、容赦ない平手打ちが女性の頬に与えられる。

男は何度目かの射精を終えると、女性のキャミソールで一物から滴る白濁した液体を拭い取る。男のソレは萎えてだらしく垂れ下がり、動きに合わせて左右に揺れる。

男は舌打ちして立ち上がると赤ん坊を両手に抱き、頭上へ持ち上げる。そして真下へ勢いよく投げつける。鈍い音がして赤ん坊は空気の抜けたボールのように、奥の部屋へと転がっていく。赤ん坊の泣き声はさらに大きくなる。男はまた舌打ちをすると奥の部屋へ行き、赤ん坊をまた高々と持ち上げる。そして何度も床へ叩きつける。赤ん坊の泣き声は徐々に小さくなり、やがて男が床に投げつける鈍い音しか聞こえなくなる。

女性が力の入らない足腰で四つんばいになり、手を伸ばしながら

赤ん坊の名を呼ぶ。男はぐったりとして動かなくなつた赤ん坊をボールのように蹴り上げると、続いて女性の顔を蹴り上げる。声も出せずに仰向けに倒れた女性の鼻と口からは血が滴り落ちる。男は女性に馬乗りになると、ためらいもせずに持っていた包丁を女性の胸の真ん中へ突き立てる。女性の口から血の混じつた泡と苦悶の声が湧き出て来る。男は汚いものでも見るような目で女性を見下ろし、舌打ちをする。男はめんどくさそうに包丁を片手で持ち上げる。そして首と言わず顔と言わず、女性の上半身を何度も刺し続ける。

男の名は高司と言った。

目撃証言などもあり、警察の執念深い捜査の結果一ヶ月後高司は知人の女性宅で身柄を確保された。始めは犯行を否認していた高司も、繰り返される取り調べにとうとう犯行を自供した。

高司は団地の近くに住んでいた。公園で赤ん坊を連れて歩くその女性の姿を見て欲情したという。その後も買い物帰りや散歩などでよく見かけるようになり、その劣情を増大させていったらしい。女性はその当時二十四歳。結婚して二年目、子どもは生まれたばかりであった。

中小企業のサラリーマンの夫はいつも帰りが遅く、妻の誕生日だったその日もどうしても抜けられない残業で結局いつもの帰宅時間になつてしまった。それでも妻の好きなシクラメンの花束とアンパン頭のキャラクター人形をプレゼントに買って夫は帰宅した。いつもは明るくおかえりを言ってくれる妻の姿はなく、赤ん坊の泣き声も聞こえない。代わりに濃密な血臭が室内に充満しており、夫はその惨状を発見することとなる。

取り調べによって動機は判明したものの、犯行に対する高司の反省の弁が聞かれることはなかった。裁判が始まり、女性の夫であり

赤ん坊の父親でもある男性は職も辞し徹底的に争う姿勢を見せた。夫は高司の死刑を望んだ。

一審では無期懲役。高司は弁護士を通して控訴した。半年後の二審でも無期懲役。さらにその判決を不服とした高司はさらに上告し、判決は最高裁判所に委ねられることになる。長い裁判期間を経て最後に高司に下された判決はやはり無期懲役だった。

マスコミはこの事件をこぞって報道し、連日特番も組まれた。世論は概ね夫に傾いていたが、それも死刑撤廃運動の波に押されて次第に沈静化していく。高司が刑務所に送致されるとその話題もあつという間に風化していった。

高司は当時まだ十七歳だった。

三十歳になった高司は、保護観察付きとはいえ仮出所することになった。就職は国が斡旋してくれた。しがない町工場だが、生活する分には困ることはない程度の給金が出る。

伸び始めた黒髪が額にかかる。高司は久しぶりに嗅いだ自由な空気を深く吸い込む。青空を白い雲が横切り、つがいの小鳥がかわいらしい鳴き声を立てながら木々を渡っていく。

自宅に向かう土手を歩いていくと、下校途中の小学生の列がすれ違つていく。高司は眩しいものでも見るかのように目を細めて振り返る。その顔は晴れ晴れとした満面の笑顔だった。

高司は現在、妻と生後三ヶ月になる子どもといっしょに暮らしている。被害者の夫は、いまだ職場復帰は成されていない。

第五回【憎悪】：高司（後書き）

これは実際にあった事件を元にしたお話です。

第六回【不安】：親友（前書き）

禁則事項

？名前の記載禁止

？！と？の使用禁止

？会話文の使用禁止

<オリジナル禁則事項>

・原稿用紙五枚ぴったり、つまり改行・空白を入れて2,000字
ぴったり。

・作中の登場人物に会話させ、なおかつ会話の内容がわかるように
する。

・伏線の回収を始める。

第六回【不安】：親友

僕の親友はプレッシャーや不安にとても弱い。小学生の時、授業中先生に指されて失禁したこともある。一番ひどかったのは学習発表会の時だ。ステージの上で大きい方を漏らしてしまった。極度の緊張は彼の胃腸をおかしくさせるらしい。

受験の時もひどかった。彼は試験中何度も過呼吸に陥った。その度に僕は、用意していたビニール袋で応急処置をした。高校側も容認してくれて、僕は数学と英語を彼と一っしょに保健室で受験した。入学してからも彼とはずっと同じクラス。僕が彼の保護者役となるのも自然な流れだった。

僕はその役割が別に嫌なわけではない。昔からの親友として当たり前のことだからだ。普通こういうヤツはいじめの対象になりやすいが、逆にここまで哀れだと周囲の同情を買いやすい。何かあれば彼を守ってやるつもりだったが、そういうこともなく高校生活も無難に過ぎていった。

入学してからの彼は少しは強くなったらしく、不安による体調不良もかなり減ってきた。それは喜ばしいことだったが、少し寂しくもあった。ある意味親離れする子どもに対する心境に近い。

そんな親友にある時変化が訪れた。そわそわして妙に落ち着かず、授業中も上の空。休み時間に外を眺めてため息をつく回数も多くなつた。

彼のことは誰よりも知っている僕はすぐに気がついた。彼は恋をしているのだと。

案の定問い詰めると、彼は素直に白状した。なんと彼の意中の相手は学年、いやこの学校でも一番といわれる美少女だった。彼女はうちのクラスの委員長をしている。頭も良く教師からの覚えもいい。かといってそれを鼻にかけることもない。男女共分け隔てなく接す

るため信頼されており、決して敵を作らない。若干不思議ちゃんなところはあるが、それも魅力と言っているいい範囲だ。

対して親友はごく普通の男子。イケメンではないし、身長は中の下。頭は中の上。学年トップレベルの委員長とは月とスッポンだ。そう考えれば、高嶺の花である委員長に対する恋心は早々に諦めさせるのが彼のためだ。しかし彼はそれを頑として拒んだ。今まで僕の言うことには素直に従ってきた彼にしては、それは頑なな態度だった。

そこまでの強い想いなら、保護者代わりの僕としては一肌脱ぐしかない。極度にプレッシャーや不安に弱い彼に、告白する勇気を持たせてやらなければならぬ。親友として。たとえ百パーセント振られるとわかっていたとしても、後悔だけはさせたくない。

委員長は数多くの告白を断り続けている、難攻不落の要塞だった。

その日から僕と親友の特訓が始まった。

告白する予定の場所は体育館裏の榆の木の下にした。晩秋の今は落ち葉がいい感じに降り積もっていて、告白するにはいい雰囲気だ。セリフも一字一句入念に考え、相手の反応に応じてあらゆるパターンを用意した。行動も脚本を作った。委員長は表情豊かな女の子なので、その心情は手に取るようにわかる。表情によって親友の取る行動も変わってくる。これも考え得るすべてのパターンを網羅した。ここまで準備すれば、まさか彼も告白中に失禁したり気絶することもないだろう。断られても笑顔でお礼が言えるし、その後も上手く学校生活を送れるはずだ。親友としては、振られるショックにだけではなく、その後の彼の人生までもケアしてあげなければならぬ。

そしてとうとう告白の日がやってきた。場所は予定通り体育館裏の榆の木の下。天候は予報通り晴れ。気温は小春日和。告白するには絶好の条件だ。

木の下で待つ親友を体育館の陰に隠れて見守っていると、すぐに呼び出された委員長が現れる。僕はときどきしながら様子を見守る。とりあえず親友は、委員長の姿を見た瞬間に気絶することはなかったようだ。彼はロボットのような動きで、ぎこちなく手を挙げる。

そしていよいよ告白が始まった。委員長の表情は少し俯き加減でよくわからない。怒ってはいなければいいけれど。せめて最後まで彼の告白を聞いてやってほしい。

彼は身振り手振りを交えながら一生懸命しゃべっている。顔は茹で鰯のように真っ赤だ。委員長は後ろ手に組み、俯いたまま彼の話に静かに耳を傾けている。時折小さく頷くのは、ちゃんと聞いてくれている証拠だろう。

とうとう告白が終わる。断つても委員長が嫌な思いをしないように、彼には告白を聞いてくれたお礼を最後には必ずするように言うのである。彼がお辞儀したのはその証拠だ。

ところが予想に反して委員長は謝らない。走り去ろうともしない。訝しんで見ていると、親友は両手を委員長の肩に置く。おいおい、それは予定にない行動だぞ。委員長が顔を上げると、親友は顔を近づける。二人の唇が重なった時、僕の頭は痺れて何が起こったのか理解できなかった。

リア充となった親友と今後上手く付き合っていけるか、僕は不安でお腹が痛くなってきた。

第七回【歓喜】：男（前書き）

禁則事項：心理描写の禁止

<オリジナル禁則事項>

・原稿用紙五枚ぴったり、つまり改行・空白を入れて2,000字
ぴったり。

- ・！と？の使用禁止
- ・伏線の回収

第七回【歡喜】：男

男は暗がりに潜んで息を潜めていた。懷に隠した包丁の柄の固さを確かめる。深夜の公園は沼の底に沈んでいるかのようにひっそり閑としている。相手の下調べは完璧だった。

不況だからこそ、下請け工場はキャパシティ以上の受注をこなさなければならぬ。限界まで単価を削られた製品は、数をこなさなければ利益にはならない。追い込みであるこの時期、相手は連日終電で帰宅していた。

「くそ、早く来い」

深夜にも関わらず、公園前の歩道は先ほどから通行人が何人も足早に歩いて行く。近くに市営住宅があるためか、この児童公園はそれなりに広い。危険だということで撤去された遊具もあり、視界を遮るものもあまりない。

「芽衣子、雄介、待つてろよ、もうすぐ仇が討てるからな」

男は携帯電話を開いて画面を手で覆い時間を確認する。深夜零時を回り日付が変わっていた。最終電車の到着時間は午後十一時五十八分。駅から歩いてどこにも寄り道をしなければ十分。男は相手が普段帰宅途中はどこにも寄り道しないことを知っていた。間もなく相手が現れる。この公園を突っ切った先にある市営住宅が、相手の家だった。

男は懷から一枚の写真を取り出す。携帯電話の明かりに家族三人の微笑ましい姿が浮かび上がる。雄介は生後まだ間もないため、顔を真っ赤にさせて泣いている。反対に父親も母親の芽衣子も満面の笑顔だ。

「芽衣子、雄介……」

男は浮かんできた涙を手の中ですぐ拭き、写真を懷にしまう。歩道の街灯を人影がよぎる。一瞬見えた白い顔は、まさしく男が殺すべき相手であった。

「来たな」

男は懷から包丁を出す。新聞紙を外すと白刃が闇にきらめく。相手はゆっくりとした足取りで近づいてくる。以前は金髪だった頭も、今はすっきりとした短い黒髪になっている。意識して伸ばしていると思われる顎髭は、その顔を年齢以上の容貌に見せている。

相手は紺のジャケットを着ており、ジーンズのポケットに両手を入れて男の目の前を通り過ぎる。砂利を踏む足音が遠ざかる。男は隠れていた藪から飛び出て相手の背後へ走り寄り、そのまま体当たりするように包丁を突き刺した。

「う……」

一瞬動きを止めた相手は、首を回して血走った目をゆっくりと男へ向ける。

「あ、あんたは……」

「芽衣子と雄介の仇だ」

男は包丁をさらに深くねじ込む。相手は口を大きく開け、血の塊を空中へ吐き出す。

「ぐ、げはっ」

男は一旦包丁を抜く。相手はゆっくりと力なく前のめりに傾き、両膝を地面につく。男は相手の肩甲骨辺りに靴裏を当て、うつぶせに蹴り倒す。

「お前の家族にも俺と同じ思いを味わわせてやる」

男は相手の背中に馬乗りになり、両手で握った包丁を振り上げる。

「法が許しても俺が許さない。罪をいくら償ったって、芽衣子と雄介は戻ってはこない」

男は包丁を何度も振り下ろす。

「ぐ、が、かはっ」

うつぶせになった相手は、包丁が突き刺さるたびにぐもった声を何度も上げる。次第にその声は聞こえなくなり、相手の首は包丁を突き刺す反動で人形のように力なくかくかくと揺れ動くようになる。

相手のジャケットの背中は、すでにどす黒い血で染め上げられている。傷口からは鮮血に加えて白い骨まで見えている。振り上げた包丁には、真っ赤な血液と黄色い脂肪がべつとりとまとわりついている。ぴくりとも動かない相手を見ると、男は返り血に塗れた顔に微笑を浮かべる。

「は、はは、やった、やったぞ」

男は立ち上がると、即座に公園の公衆トイレへ駆け込む。個室に隠してあったバックの中から着替えを取り出し、代わりに返り血でべつとり汚れたシャツとジーンズを脱いでバックに入れる。履いていたスニーカーも脱ぎ、同じバックに押し込む。取り出したジャージと運動靴を身に着け、血まみれの包丁も新聞紙にくるんでバックに入れる。

個室から出ると洗面所の鏡を見る。顔中に返り血が飛び散っている。髪にもついているが、夜の闇の中では誰かとすれ違っても血だと判別されることはない程度だ。

男は水を出して顔を洗い、持っていたタオルで拭くとトイレの出入り口に忍び寄る。首だけ出して外の様子を覗き見ると、暗い公園には俯せになった相手の死体以外は誰もいない。

男は公衆トイレから出ると、街灯の光の輪を避けて暗闇を移動しながら公園の出口へ向かう。その時男は泣きそうな表情になって小さく声が出かかり、バックを持つていない方の手で口を覆う。歩道に出て素早く左右の様子を伺うが、通行人は誰もいない。男は脱兎のごとく走り出す。公園から数百メートル離れた堤防沿いの道まで来ると、男は口から手を離す。

「く、くく、くくく、くあっはははは…… やった、ついにやったぞ」

男は走りながら、気が狂ったように笑い続ける。腹を抱えてふらつきながら走る男の姿を、月明かりが暗い川の水面に映し出していた。

第八回【光景】：先生（前書き）

禁則事項？／直喩法使用禁止

禁則事項？／固有名詞使用禁止

<オリジナル禁則事項>

・原稿用紙五枚びつたり、つまり改行・空白を入れて2,000字
びつたり。

・伏線の回収をする。

第八回【光景】：先生

「ねえ、この間の殺人事件の犯人まだ捕まってないみたいね」

放課後になるとすぐに、委員長が僕のところへやって来る。周囲の目が気になるけど、彼女が彼氏のところへ来ておしゃべりをするのは別に悪いことじゃない。最近僕はそんな風に関き直ってきた。

「ああ、被害者が実は昔殺人犯だったって事件？」

十五年前、その被害者は殺人事件を起こしていた。日中宅配業者を装って家に上がり込み、奥さんと生後三ヶ月になる子どもを殺した悲惨な事件だ。家族を奪われた父親は死刑を望んでいたようだが、犯人が未成年だったこともあり判決は無期懲役。今回殺された被害者は仮出所中だったらしい。

「でも犯人はどう考えてもその父親でしょ？ 何で捕まんないのかなあ」

「それがね」

委員長はぐつと身を乗り出してくる。た、谷間が……

「その父親には完璧なアリバイがあつたのよ」

「アリバイ？」

委員長は周囲を気にしながら、声を潜める。

「何と事件当日、父親は講演のために遠くにいたのよ」

「それは完璧なアリバイだね」

講演というからには当然聴衆がいる。何百人もの証人がいるわけだ。事件が起きたのは深夜だが、父親は泊まっていたホテルから一歩も出ていなかったそうだ。

「それにしても、元殺人犯が近くに住んでたなんて怖いわね」

「そうだね」

事件の起きた児童公園は、ここから数百メートルしか離れていない。そこはいまだに中に入れないようになっていいる。

「死体を発見したのは朝ジョギングしてた人みたいね」

「ああ、新聞に載ってたね」

「包丁で滅多刺しされてたらしいけど、そんな光景見たら一生忘れられないわね」

「夢に見ちゃうよね」

僕は想像して気分が悪くなってくる。そんな僕の様子に気づいたのか、委員長が明るい声で話題を変える。

「ねえ光景って言えば、忘れられない光景ってある？」

「忘れられない光景？」

僕は人生というほど長くはない今までの人生を振り返る。

「うん、やっぱり去年おじいちゃんが死んじゃった時かな。医療器具やお医者さんたちに囲まれて痩せ細ったおじいちゃんの姿は一生忘れられない」

「そっか……」

委員長は神妙な顔で僕を見つめる。その顔はとても大人びていて僕はドキドキしてしまう。かわいらしい唇に目を奪われ、僕は慌てて言葉をつなぐ。

「い、委員長は？」

「あたし？ あたしは……」

「あれ？ お前らまだ残ってたのか」

「あ、先生」

担任が教室へ入って来る。見回りに来たようだ。

「放課後はすぐ下校しないとダメだぞ」

事件の影響で部活など放課後の活動はしばらく中止。生徒はすぐに下校することになっていた。

「すみません、すぐ帰ります」

僕が鞆を持って立ち上がると、委員長が先生に話しかける。

「ね、先生の忘れられない光景って何ですか？」

「忘れられない光景？」

先生は思案顔になる。

「やっぱあれだな。大佐が落ちてくシーンだな」

「大佐？ ああ！」

委員長は合点がいったようだ。僕も思い出した。先生はそう言えばアニメが好きで、有名なアニメの悪役に自分を重ね合わせて授業中熱く語ってたっけ。

「なんだお前らそんな話してたのか？」

「あ、いえ、殺人現場見ちゃったりしたら忘れられないかなって…」

「殺人か……」

「難しい事件ですよ。被害者は確かに昔ひどい事件を起こしましたが、法的にはきちんと罪は償っている。心情的に犯人の気持ちちは理解できるけど、やっぱり殺人は許されることじゃないですよ」

「法的にだって？」

先生の顔色が変わり、怒気を孕む。委員長は驚き、身を強ばらせて僕の腕を掴む。

「法的に償ったって、殺された奥さんと赤ちゃんは戻っては来ない！ アイツはそれなのにのうのと仕事して生活して家族まで持ってた。父親がこの十年以上どれだけ苦しんだことか！ 俺にはわかる。あの男は死んで当然だったんだ。神が天罰を下したんだ！ 法は俺たちを守っちゃくれない。救っちゃくれない。あの男は殺されて当然のことをしたんだ！」

先生は顔を真っ赤にして机を激しく叩いている。委員長が僕の腕を力一杯握るものだから、僕は痛さに顔をしかめる。先生はしんとした校舎に自分の声が響いていることに気づき、はっと我に返る。

「あ、ああ、すまんすまん。お前らに力説してどうすんだよなあ、ははは」

「い、いえ、すみませんでした。僕たち帰ります、さようなら」

「ああ、さよなら」

僕たちは慌てて頭を下げて教室を出る。

「びっくりしたねえ、先生ってトランスしやすい人だって忘れてた」

「うん」

道すがら委員長はおもしろがってはしゃいでいる。

「何だか霊とかが乗り移ったみた…… あ、ヤバい禁則事項破っちゃうところだった」

「うん…… って、なに言ってるの？」

僕は委員長と会話しながらも、先生の激昂して机を激しく叩く光景が忘れられずにいた。

第九回【砂漠】：田島（前書き）

禁則事項？／擬態法使用禁止

禁則事項？／擬人法（偽物表現も含む）使用禁止

<オリジナル禁則事項>

・原稿用紙五枚びつたり、つまり改行・空白を入れて2 / 0000字
びつたり。

・「！」や「？」の使用禁止

・伏線の回収をする。

第九回【砂漠】：田島

「失礼します」

生徒指導室のドアを開けて、一人の男子生徒が入って来る。窓際に立ってグラウンドを眺めていた田島はゆっくりと振り向く。

「冴島よく来たな、まあ座れ」

「先生、僕何も悪いことなんかしてませんよ」

冴島は油断のない目つきでパイプ椅子を引き、軋んだ音をさせて座る。

「ああもちろん、指導するつもりで呼んだんじゃない。話を聞きたかっただけだ」

「話」

冴島 明は頭がよく、生活態度も今時の高校生にしてはきちんとしている。いわゆる模範生徒の部類に入る。時々頭が良すぎるせいか突拍子もない言動や行動もあるが、学校という小さな社会の中では十分許容できる範囲だ。

「お前は優秀な模範生徒だ。そのお前が最近様子がおかしいんでな。担任として心配してるんだ」

「ああ」

冴島はばつが悪そうに視線を落とす。

冴島は最近よく欠席する。以前は何があろうとも、学校を休むようなことはなかった。成績も落ち込み気味だ。といってもいまだトップグループの下の方というレベルではあったが。

笑顔が少ないのは以前からそうだったが、最近は少ないというより寂しげな表情の方が目立つ。割と素直で明るい生徒の多い田島のクラスの中にあつては、やはりそれはよく目立つ。

「何があつたのか教えてくれないか」

田島は極力優しい声で話しかける。自分はそれなりに生徒たちに信頼されている教師だとの自負はある。女子生徒からの恋愛相談

などを持ちかけられることもある。加齢臭のするセクハラおやじ教師やヒステリックなおばさん教師よりは、よほど信頼されている証拠だろう。

「何もないですよ」

予想通りの冴島の返答に田島はしつかりと頷く。何もない生徒はそんな辛そうな顔で返答しない。田島はそれなりに経験を積んだベテラン教師だ。そういう生徒に心を開かせる術はいくらでもある。頭のよい生徒であればあるほど、自分の中で悩みを抱え続ける愚かさはいくわかつているはずだ。

「俺はちゃんと知ってるぞ」

含みを持たせた笑顔で冴島を見つめる。冴島の細い目は探るように田島を見ている。

「な、何をですか」

そして視線を逸らす。田島には冴島の動揺が手に取るようにわかる。

「お前、多田と何かあっただろう」

冴島の目が大きく開かれ、次いで視線が泳ぐ。やはり正解だったようだ。冴島はその言動や行動において、他者に忌避されやすい傾向がある。いわゆる変人という評価を周囲にはされている。それを表立って指摘したり批判する者はいないが、接触しないという方法で間接的に評価している。唯一冴島の友人と呼べるのは多田洋平のみだ。冴島は多田を親友と思っているようだが、その実多田の方ではそうは思っていないらしい。周囲の話を総合すると二人のそういう関係がわかる。つまり多田は冴島にとって唯一無二の存在なのだ。その多田が最近田島のクラスの委員長と付き合いだした。意外な組み合わせに驚きはしたが、それは微笑ましい関係のようで田島は知らない振りをしていた。つい先日放課後二人で仲良くあの事件について話をしていた。

「委員長のことが」

田島の口調は質問とも取れるし確認とも取れる。しかし冴島にと

つてはどちらでもいいだろう。田島がそこまで知っているとこ
とが伝わればいいのだ。心の防波堤さえ崩せば、後は牙島自身が勝
手にしゃべってくれる。

「お前は委員長が好きだったのか」

「違います」

心持ち紅潮した顔で牙島が顔を上げる。

「そりや委員長は美人で頭もいいですけど、好きとかそういうんじ
やないです」

これは言い訳ではないだろう。となれば答えは一つ。

「それじゃ多田か」

牙島は声にならない呻きを上げて頂垂れる。そういうことなのだ。
唯一抛り所となっていた親友を女に取られる。牙島は多田が自分
との友情よりも委員長との愛情を取ったと思っているのだろう。細
かいことまではさすがの田島も知らないが、多田が委員長と付き合
う過程においては牙島もいろいろと協力をしたらしい。それは多田
に上手くいつてほしかったわけではなく、親友として当然のことだ
と思って協力したのだろう。牙島の中では、まさか多田が委員長と
付き合い出すとは思えなかった。ところが付き合いだしてしまった。
牙島にとっては、まるで自分から多田を委員長に取られてしまった
ように感じるに違いない。

「なあ牙島、辛いか」

田島はすべてわかつているという口調を崩さない。牙島ならそれ
で十分伝わる。その証拠に牙島は小さく頷いた。

「お前の気持ちはよくわかるぞ、俺も昔親友に彼女を取られたこと
があつてな」

その親友はこの手で殺したが。

「この件、俺にすべてを任せてくれないか」

その言葉は乾ききつた牙島の心に、一滴の水となつてしみ込んで
いく。牙島はさすがのような目で、田島を見つめる。田島が牙島の負
の面に同調するには、それだけで十分だった。

最終回【幸福】：僕（前書き）

禁則事項／手抜き禁止

<オリジナル禁則事項>

・原稿用紙五枚ぴったり、つまり改行・空白を入れて2,000字
ぴったり。

・ちゃんと終わらせる。

最終回【幸福】：僕

何となく嫌な予感がする。こみ上げる胃液が不安な気持ちをいや増しさせる。僕の胃腸は以前より強くはなつたけれど、それ以上に強い不安が僕の内臓をかき混ぜる。

委員長が戻って来ない。彼女は放課後担任に呼び出され、僕は教室ですっと待っている。いきなり進路相談もないだろうし、クラスのことと言ってもわざわざ呼び出して話すこともないと思う。

「洋平」

教室で所在無げにそわそわしていると、後ろのドアから明が顔を出す。

いつもは飄々としている明は、最近暗く無口になった。学校も休みがちで、僕も友人として心配していた。今日は朝から学校へ来ていたが、一日中様子がおかしかった。

明は通学に使っているバックを背負い、いつも持ち歩いている紙袋を持ったまま何か言いたそうに僕をじっと見つめている。

「何？」

委員長のことが気になって仕方ない僕は、ぞんざいな物言いになつてしまう。明はそんな僕の言い方を気にする様子もなく、視線を泳がせる。

「い、委員長の、ことだけど」

僕は音を立てて椅子から立ち上がり、早足で明に詰め寄る。

「委員長がどうかしたの？」

明は僕の勢いに押されて少し身を引く。視線を床に泳がせながら、おずおずと口を開く。

「ま、まさか先生があんな人だったなんて、僕知らなくて」

「どういうこと？」

明の腕は少し震えている。僕は嫌な予感で吐き気が強くなる。

「せ、先生の様子がおかしくって……僕、そんなつもりはなかつ

「ただ」

明は動揺しているらしく、何を言いたいのかわからない。けれど委員長の身が危ないということは伝わった。

「くそっ！」

僕は明を押しつけて走り出す。一体何が起こってるんだ。僕は人気がない廊下を走りながら、こみ上げる胃液を何度も飲み込む。早く委員長のところに行かなくちゃ！

後ろからは明がついて来ている。僕は階段を二段抜かしで駆け上がり、夕日の差し込む渡り廊下を全速力で走り抜ける。突き当りにある生徒指導室のドアに、ノックもせずに手をかける。しかしドアには鍵がかかっていて開かない。

「委員長！ 先生！」

激しくノックする。すると室内でパイプ椅子の倒れる激しい音と悲鳴が聞こえる。

「きゃああっ！」

「委員長！」

僕はドアを何度も激しく叩く。

「どけっ！」

明がドアに蹴りを食らわせると、音高く外れて隙間ができる。僕は中にドアを押し込んで生徒指導室へ入る。中では包丁を振り上げた田島が、委員長を窓際へ追い詰めていた。

「先生、なにしてんですか！」

「洋平、委員長を助ける！」

明が飛び出し、紙袋で先生に殴りかかる。

「冴島、なぜ邪魔するんだ？」

先生は不気味に笑っている。

「委員長こっちへ！」

明と先生が組み合っている隙に、委員長は僕のところへ走って来る。僕は手を引いて走り出す。

「せ、先生がいきなり刺そうとしてきたの！」

委員長は息を乱しながら震えた声を出す。とにかく今は逃げないと。

一階に下りると、反対側の階段から田島が下りてくるのが目に入る。

「くそっ！」

僕は委員長の手を引いて、横の教室へ入る。自分のクラスだ。教卓の陰に委員長を隠し、周囲の机でバリケードを作る。時間を稼げば誰か助けに来てくれるはずだ。

「ここか！」

勢いよくドアが開き、田島が現れる。その目はどう見ても普通じゃない。

「先生、一体どうしたんですか。正気に戻ってください！」

「その女がすべて悪いんだ！」

先生が手前の机を蹴り飛ばし、派手な音を立てて倒れる。すると突然教卓の中から二種類の声が聞こえる。

「おい、お前が飛び掛かれよ！」

「ざけんなよ、お前が行けよ！俺は刺されたくねえし」

田島は僕が委員長を守っていると思っていたから、不審な顔で教卓を見る。その隙について誰かが田島に飛びかかる。

「このやろっ！」

包丁がその人物の頭に刺さる。風船の割れる音がして、その人影は破裂する。驚いた田島の動きが止まった瞬間、背後から明が飛びかかった。

「明！」

僕も田島に飛びかかる。包丁は廊下の先へ転がっている。

割れたのは明の作ったダッチワイフだった。委員長の叫びで、廊下の向こうからたくさんの足音が迫ってくる。僕は極度の吐き気で目の前が潤んでいた。

田島はリンクした人物になりきってしまうという精神病だったら

しい。ほどなく先日の殺人事件も田島が犯人だったことがわかった。
僕は今生きている幸福を噛みしめている。友人も恋人も無事だ。

僕ら一人ひとりは小さな存在だけれど、それでも懸命に生きている。
夜空を彩るのは強烈な存在感を持つ太陽でも、美しく目を引く
月でもない。小さな星々の光だ。

僕は暗闇を照らすたくさんの星屑の中の一つでありたい。そして
小さくても、その場所ですつまでもしっかりと光り続けていきたい。

いつか必ず、誰かが見上げてくれるから。

最終回【幸福】：僕（後書き）

今まで長い間ありがとうございました。
これからもよろしく願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6155o/>

【五枚会】スターダスト・ノベルズ

2011年3月19日20時10分発行